

課題 2 . 子どもの事故予防活動状況

| 活動項目 | 活動項目別の実績(概要) |
|---------|---|
| 実施活動 | 1. 子ども事故予防ハウスの運営 2. 事故予防に関する教室等 3. ビデオ、パネルを媒介とした事故予防情報提供 4. 外来受診者から事故体験の募集 5. 子どもの事故サーベイランス事業 6. 学術活動 |
| 教育・研修 | 1. 平成 17 年 11 月 13 日の愛知の子ども健康フォーラム 子どもの事故予防コーナー 一般対象 2. 事故予防に関する教室、研修会講師等 刈谷市立富士松南保育園児の保護者向け 120 名 ウィル愛知 託児ボランティア育成講座 48 名 半田市 託児ボランティア育成講座 30 名 知多市ファミリーサポーター講習会 22 名 ひかり乳児院職員 10 名 碧南市子育て講演会 30 名 豊明市ファミリーサポーター講習会 20 名 多治見市子育てボランティア講座 15 名 里親ヘルパー研修会 2 回 26 名 愛知県現任保育士指導者養成 35 名 藤田保健衛生大学衛生看護学科 43 名 外来患者対象の救急蘇生法の実施 5 回 計 43 名 |
| 保健・医療相談 | <p>事故に関する相談は H 17 年 4 月～ H 18 年 3 月の 1 年間で時間電話相談 653 件（時間外電話相談の 10.8%）であった。</p> <p>時間外電話相談の事故内訳は誤飲事故が 306 件で圧倒的に多く、次いで転落事故 98 件、転倒事故 91 件が続いている。誤飲事故の内訳は文具類、医薬品、化学製品(化粧品等)が多かった。</p> |
| 情報サービス | 1. センター1階 子ども事故予防ハウスの運営 事故予防ハウス利用者数 個別 225 人 団体 773 人 計 998 人 2. ビデオ、パネルを媒介とした事故予防情報提供 県民健康祭にパネル展示（熱さましシート事故、屋外での事故について） あいち健康プラザに事故予防ハウスのパネル展示 3. 外来受診者から事故体験の募集 4. 雑誌等取材 ・あのねっと取材 |

| | |
|-------|---|
| 調査・研究 | <p>1.子どもの事故サーベイランス事業（平成14年度より開始5年計画）</p> <p>知多市 期間：平成17年4月～平成18年3月</p> <p>1歳6か月 健診受診数 810 回収数 768（回収率94.8%）</p> <p>3歳児 健診受診数 876 回収数 839（回収率95.8%）</p> <p>碧南市 期間：平成17年4月～平成18年3月</p> <p>1歳6か月 健診受診数 738 回収数 712（回収率96.5%）</p> <p>3歳児 健診受診数 660 回収数 660（回収率100%）：2月まで</p> <p>知多市と碧南市の乳幼児健診を利用して子どもの事故予防事業の構築に対し連携している。内容としては事故サーベイランス事業を協同して実施している。</p> <p>平成17年度中に知多市では1歳6か月健診768人中328件、3歳児健診839人中315件の事故報告、碧南市では1歳6か月健診712人中419件、3歳児健診660人中310件の事故報告について分析を行い、それぞれの保健センターに情報還元を実施した。</p> <p>各市ではこれに基づいて、家族への啓発活動を実施している。</p> |
| 学術活動 | <p>学会・研究会等</p> <p>中部小児科学会、愛知県公衆衛生研究会</p> <p>演題名：乳幼児の事故重症化要因についての検討</p> |

この事業に関連した実績としての調査報告やパンフレット、インターネット情報

| 資料の名称 | 発行日等 | 資料番号 |
|---------------------------------|------|------|
| 雑誌等掲載 ・ あのねっと No20 2006年3月発行 | | |

活動企画担当者の総括

実施活動項目ごとの評価：子どもの事故予防活動

| | |
|---|---|
| <p>評価の方法・手段</p> | <p>子どもの事故予防ハウスの利用者数 事故予防教室の開催回数と参加者数 子どもの事故サーベイランス事業の集計状況</p> |
| <p>評価の概要</p> <p>a. 数値目標等の達成度</p> <p>b. 愛知県の母子保健への貢献</p> <p>c. その他</p> | <p>1.有用性</p> <p>子どもの事故予防ハウスの見学者数は957人であった。センター見学の際には救急蘇生法の実演を実施する際には見学者も多くなっていた。事故予防ハウスの見学者は意識の高い人が多く、熱心に見学される方が多かった。</p> <p>寄せられた事故体験は重傷度の高い事故につながりやすい出来事が多く、事故が誰にも起こりうるということを改めて感じさせられる機会になっている。</p> <p>外来患者対象の救急蘇生法の実施については4回49名の参加であった。回により参加人数はばらつきが大きかった。</p> <p>センター外からの事故予防教室の依頼や取材等があった。</p> <p>相談では昼間の保健医療相談では年間13件と非常に少なく、夜間の時間外電話相談では565件（時間外電話相談の9.2%）で、誤飲事故が多かった。</p> <p>サーベイランス事業は3月までの集計では、事故発生場所は圧倒的に家庭内が多く、起こっている事故は1歳6か月までは誤飲、3歳までは転落、転倒が多く発達と共に事故の種類は変化していた。</p> <p>2. 問題点</p> <p>定期的に事故予防ハウスが開けられない状況が継続し、事故予防に関するビデオを流したり資料を見ていく人はいるが、声をかけてもなかなかハウス内まで入る人は少なかった。医療部門との連携を充実させていく必要がある。</p> <p>子どもの事故予防に関しては、全般に意識が低い現状がある。積極的なPRが必要と感じている。</p> <p>現在の事故サーベイランス事業を通じて情報還元の方法について検討し、地域が取り組みやすい事故予防活動づくりが必要と感じている。</p> <p>3.事業継続に関する意見</p> <p>子どもの事故については年齢と事故が大きく関連しており、機会を捉えて情報を伝えていく必要がある。子ども事故予防ハウスの利用方法やセンター内での事故予防教室の実施など検討し、子どもを持つ家族が事故予防を自然に取り組めるような活動をしていく必要である。特にセンター内で医療部門と連携して院内理解を深めていく必要がある。事故予防ハウスについては実践教育の場として運営方法や開室日数を増加していけるようにしたい。子どもに安全な環境を整備していけるように子育てに関わる方達と連携して特にホームページに事故予防に関する情報を充実させていきたいと考えている。</p> <p>二市で事故サーベイランス事業を実施しているが、ここで得られた情報を活用して情報サービス事業を充実させ、事故予防策の検討を継続的に実施し、有効な対策を作成していきたいと考えている。事故サーベイランス事業を簡素化し、継続的な事業として実施していける形を検討したい。</p> |